Osaka University Knowledge Archive

Title	六十二見を中心とする初期仏教における外道思想の研究
Author(s)	畑, 昌利
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47097
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【12】

氏　　名	畑（はた）　昌利（まさとし）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２０７８３　号
学位授与年月日	平成 19 年３月 23 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化形態論専攻
学　位　論　文　名	**六十二見を中心とする初期仏教における外道思想の研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　榎本　文雄 （副査） 教　授　湯浅　邦弘　　講　師　堂山英次郎

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、初期のインド仏教で伝えられていた外道思想（非仏教思想）の解明を目的とし、その非仏教思想を 62 に纏めた六十二見を中心課題に据えて、第１部では六十二見を伝承する文献資料、第２部では六十二見全体、第３部では六十二見の中で特に問題となる見解を検討し、付録として六十二見を伝える文献資料のチベット訳の「梵網経」と『ウパーイカー』、漢訳の「梵動経」と『舎利弗阿毘曇論』の対照テクストを附したものである。

第１部では、六十二見を伝承する諸文献に関して従来の研究で不明とされていた諸点の解明を試みる。特に、本論文の中心文献である「梵網経」に関して、まずその題名の中の「網」は、「網羅」の意味が第一であり、捕縛のニュアンスをも仄めかしていると論じ、次いで「梵網経」の内容構成から仏教の内面重視の態度が如実に表われている点を指摘する。さらに「梵網経」のパーリ語以外の諸異本に関して、サンスクリット写本断片、漢訳、チベット訳に至るまで詳細に異同を検討し、漢訳者に関しても新しい知見を加える。

第２部では、まず、「梵網経」と「五三経」に基いて、六十二見は、従来の理解のような六十二種の異なる見解ではなく、また誤った見解でもないことを明らかにする。さらに、他の仏典では、六十二見を有身見や無記と関連付けるもの、空性と結び付けるもの、単に邪見と称するものというように多種多様な解釈が施されているが、六十二見がアートマンと関連する見解の集成であることは比較的後代まで意識されていたと指摘する。

第３部では、六十二見の中の３種の見解に考察を加える。まず、断滅論に関して、「梵網経」に基づいてこの主張内容の意図を検討し、しばしば混同される虚無論との相違点を明らかにする。さらに、仏教と断滅論との関係について考察し、諸存在の死後の消滅を断滅論が明言するのに対し、仏教はその不可視化を示唆する点に両者の差異が存在すると論じ、他方では仏教が「アートマン」や「我」という語の使用を避ける傾向のあることや、パーリ仏典の伝承者による聖典操作の可能性にも言及する。第２に無因生起論に関しては、仏教が縁起と無因生起論とを意図的に区別しようとしている事実を指摘する。次いで、無因生起論と無因論の関係、また無因論と偶然論・自性論との関係を、ジャイナ教やバラモン教の文献にまで亘って広く考察した上で、後代の仏教文献のみならず初期の仏典にもこれらの諸論を同一視する傾向が存在することを明らかにする。第３にアマラーヴィッケーパに関して、現在使用されている訳語「鰻問答」は不適当であるとして、代案を提示する。また、アマラーヴィッケーパに、相手に尋ねられた通りに返答する態度を指す伝承があることも指摘する。

論文審査の結果の要旨

本論文は厳密な文献学的方法に則ったインド思想研究の着実な成果である。主資料の初期仏教文献の扱いでは、その最も重要なパーリ語の原典テキストに関して、学界では一般に Pali Text Society 版のみで済ませる手法が多いにもかかわらず、本論文ではタイ、ミャンマーの各版が常に対照され、厳密な文献学的方法が取られている。パーリ文献を中心とする初期仏教文献の内容理解に関しても、従来の内外の研究では、ともすれば研究者自身の独断的な解釈に陥る傾向があった中で、本論文においては、パーリ語の註釈のみならずサンスクリット写本断片や漢訳・チベット訳を含む諸並行箇所が網羅的に収集検討され、さらに言語学的な分析が加えられて、一層の考究は必要なものの、文献作者の原意に即した読解への努力が可能な限りなされている。以上の方法によって、従来、誤解されていたり、見過ごされていた六十二見を中心とする非仏教思想の全体的な性格や位置付け、さらに仏教内部での六十二見の評価が明らかにされ、また、六十二見の中でも特に重要な幾つかの見解に関して思想内容の明確化が行われた。さらに、六十二見に対する仏教の評価から、仏教思想の根幹に位置する、内面重視や主張・論争の超越、さらに永続・断滅の何れの主張にも与しない微妙な立場が鮮明に浮かび上がった。付録の対照テクストは、以前から必要性が唱えられており、公刊された暁には当該資料の利便性を高めるものである。このように、本論文は、文献資料の綿密な読解並びに先行研究に対する批判的視点を通して、六十二見を中心とする非仏教思想やそれらを伝える文献資料の解明と、これら非仏教思想との対比による初期仏教思想の核心の鮮明化に貢献した。

ただ、形式面では、本論文における文献分析と思想分析の提示方法に一層の工夫の余地があり、内容面では、以上の六十二見の各見解は、初期仏教当時のインドで現に実在した見解なのか、それとも仏教内部において非仏教思想として理論的に構築されたものも含まれるのかという点も検討に価する。この点で、本論文が結論で自認するように、ジャイナ教・バラモン教文献の一層の検討が望まれる。もっとも、以上の課題は本論文の意義を損ねるものでは決してなく、むしろ今後の研究の進展に展望を開くものである。よって、本論文は博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定される。